
ホットニュース(平成12年度／第33号)

●今月の業界ホットニュース／～祭りと地域活性化～

12月3日の秩父夜祭りの前日の昼に秩父市に行った。この日から曳山の秩父神社への奉納が始まっており、観光客もちらほら出始め大祭の準備もほぼ整った様子で、祭りの前の雰囲気は街じゅうに充満していた。

なかでも元気そうに見えたのが、パンチパーマのお兄さん達が街を闊歩していたり、黒山のごとく群れたりしているところであった。何かと覗いてみると、出店の区画割りの調整らしい。道路沿いにチョークでたこ焼きとかクレープとかマーキングしているところである。

確認したわけではないが会話を立ち聞きしていると、どうも関西からも大挙して来ているらしく、大阪へとんぼ返りだと嘆いているお兄さんもいた。さすが3大曳山だけあって観光客だけでなく、テキ屋も全国区のようなようだ。そういえばフーテンの寅さんは年中旅をして、祭りを渡り歩いていたようだが、彼は鄙びた祭りが好きなのか、それとも組織に属さない一匹狼だったのか、祭りのはずれのほうでぽつんと商売をしていたような気がする。

それはともかく、昨年古河市の桃祭りに行ったら、公園内の出店はプロのテキ屋グループのコーナーと、地元グループのコーナーに分かれており、客は断然地元グループに集まっていた。祭りの伝統も質も違うといえそうなのだが、祭りは都市観光の目玉であり、客をもてなす心から言えば、やはり徹底的に地元の手作りの匂いに満ちている方が楽しく、また地域の経済活性化やコミュニティの育成により有効なのではと感じたところである。

(代表取締役 堀田紘之)

●地方都市における大量消費とリサイクル

最近とみに産業振興策の調査が多くなり、IT化支援、コミュニティビジネス、エコビジネスなどの言葉が頻繁に出るようになった。地方都市では大都市との差別化を図る上で、エコや環境、循環型○△□、リサイクルなどといったキーワードが、「住みよいまち」を飾る上で用いられているが、最近地方紙を読んで驚いた。サケが大量に採れ過ぎたために、数百単位で焼却処分になるだろうとのことである。子供達を集めて稚魚を放流させて、成魚となって戻ってくるのを待つ一方で、価格調整のために大量に廃棄されているのである。確かに加工して貯蔵しようにも、ラインが追い付かず泣く泣く廃棄している場合もあるのだが、標榜するまちの姿と行っていることのギャップにはどうにかならないものか。捨てない限りは商品なのである。それこそ、まちの活性化のためのイベントや災害罹災者への救援物資として活用できないのだろうか。同様に地方観光都市では、食べきれない程の料理がテーブルに饗されては、余ったものが次々と処分される。むしろ処分されるために生産されているようだ。食の細い女性が(=女性化)ぷらっと(=余暇化)滞在するには単価が高く、多くの日本酒やワインを選べる(=多様化)わけでもなく、近年の傾向と逆行している。と、ここまで書いて、そもそも産業振興策なのだから利潤が上がれば良しとなるのだろうが、大したサービスでもないのに高付加価値と勘違いしているところもあるのではないか。

人や環境に優しいまちとは、貨幣経済に毒されず人の温もりが感じられることが前提であると思うのだが、それは利用者のわがままだろうか。

(第三計画室 黒坂剛)

●ベトナムで感じた「大切なこと」

3ヶ月のベトナム・ハノイ生活もついに終盤戦。「師走」という言葉は国境を越え、ハノイオフィスではラストスパートに入っている。クリスマス直前はハノイでのセミナーの後、ホーチミンへ飛んで再びセミナー開催と、クリスマス気分を味わう暇もないほどの密なスケジュール。そんな中、我々スタッフを癒してくれるのはハノイの緑と湖、そして人々の笑顔である。アジアの混沌とした雰囲気(匂い、音など全て)を味わえるOld Quarter、フランス植民地時代の瀟洒な建物や豊かな街路樹と、アジアに居ながらにしてパリの雰囲気を味わえるFrench Quarter、そして郊外に出ると広がる農村風景…。ハノイの魅力はその多様性と文化の豊かさにあると言えるだろう。

クラクションを鳴らしながら人々を追い越していく自動車、どんな場所でも入り込んで街中を縦横無尽に走

り回るバイクや自転車、行商のおばさんやバイクでふさがれている歩道など、交通計画の立場から見ると問題の多い都市ではあるが、それがハノイの賑わい、魅力につながっている事実も忘れてはならない。交通計画、都市計画はその国の社会や文化、生活に深く関わっている。日本の技術や知識をそのまま持ち込むことなく、まずはプランナー自らその都市に飛び込み、人々の生活に触れ、彼等にとって本当に必要なこと、大切なことは何かを知ることが発展途上国におけるプランニングの出発地点なのではないか。

自転車で街中を走り回りながら、地図やデータからは得ることの出来ない人々の生活や自然の豊かさを感じ、プランナーとして、一人の人間として、自分なりに大切なこと、これからの夢をここハノイで見つけられたような気がする。

(第一計画室 阿部朋子)

●millinniumの話題

10の3乗(ミリ)に拘わる1000年の区切りが、あと幾ばくの残日を以て終焉を迎えようとしている。

現在用いられている西暦はキリスト降誕の日を紀元としているが、実際のキリスト降誕の日を紀元前4年とする考証がある。このズレは、6世紀のはじめにローマの僧Dionysius Exiguusが誤って降誕日を推定したことによるとされている。従って、本当のmillinniumは数年前に過ぎ去っているのである。

millinniumは、millinniumsまたはchiliasmの訳語として「千年王国説」に繋がる。これはキリストが再臨して1000年間の支配を地上に確立すると主張する終末説と言われ、コリント前書15の23以下、ヨハネ黙示録第20章他の記述によるとされる。第4エズラ書の400年間のメシア王国の出現後、最後の審判が行われる。目次録では、それがイエス・キリストの千年王国として構想されていると言う。

我々の生活に関するmillinniumの2000年は、大人も子供も右往左往に終わった「最後の審判」として黙示されたように感じられる年であったのではなかろうか？

翻えて紀元1000年の頃を歴史書の頁に見ると、わが国では鉄銭を鑄造、藤原氏の全盛、清少納言「枕の草子」、紫式部「源氏物語」等。中国では北宋の時代で羅針盤、火薬、木版印刷等の発明。インドは、1010- 49年にセイロン征服、東部ジャワ統一等。ヨーロッパでは、神聖ローマ帝国の時代。ドイツ人最初のグレゴリウス5世教皇となる。ロシアではギリシア正教への帰依。

次の1000年を経た時代は、どのようになっているのか？65億年前に誕生した太陽系、6500万年前に小天体の地球激突による恐竜の破滅？1908年のシベリアのツングースカへの直径60mの小天体の衝突。

ああ！人類の皆様の御健康と御繁栄を、心から御祈り申し上げます。

(技術顧問 大塚 和之)

アルメックホットニュース(平成12年12月15日発行)

////////////////////